オンライン研修@マラヤ大学

研修報告書（2021 年春）

English Language Course

目次

a.　プログラムの概要 2
　期間 2
　参加者の出身大学..2
　人数 2
　主なスケジュール..2
　授業ごとの内容・課題 3
　アクティビティの内容 4
　プログラムのメリット・デメリット 5

b.　プログラムのハイライト 6
　オンラインならではのバディとの交流（工学部 1年 向笠紘平） 6
　Virtual Fashion Show（理学部 1年 高橋諒） 6
　ディベート（経済学部 2年 重富直樹） 7
　歌のアクティビティ（経済学部 3年 阿部圭佑） 7
　マレーシアの文化・日本の文化紹介（文学部 4年 塚原典子） 7
　ライティングと文法のスキルアップ（文学研究科 博士1年 鏡耀子） 8

c.　研修体験・成果 9
　プログラムを通して得られた成果と体験（工学部 1年 向笠紘平） 9
　研修の成果と今後の展望（理学部 1年 高橋諒） 10
　英語への意識の変化（経済学部 2年 重富直樹） 11
　英語に対する抵抗感の減少（経済学部 3年 阿部圭佑） 12
　マラヤ大学オンラインプログラム参加の研修成果（文学部 4年 塚原典子） 13
　プログラムを通して得たこと・考えたこと（文学研究科 博士1年 鏡耀子） 14

a. プログラムの概要

●期間

2 月 15 日～3 月 5 日の 3 週間

●参加者の出身大学

マラヤ大学（マレーシア）、岡山大学、関西学院大学、東北大学（日本）

●人数

日本人学生 16 名、マレーシア人学生 16 名

日本人学生一人一人にマレーシア人学生がバディとしてついてくれ、授業時間外に連絡を取ることもできる。実際、参加者の多くはバディと頻繁に連絡を取っており、一緒にオンラインゲームをしたという学生もいる。彼らは参加者とスタッフという関係性ではなく、同じプログラムで共に学ぶ「友人」として接してくれるため、非常に心強い。

●主なスケジュール

プログラムの内容は主に三つに分けられる。授業、アクティビティ、バディとの交流である。授業は Malaysian studies, Speaking and Pronunciation, Writing and Composition, Reading and Vocabulary, Grammar Usage の 5 種類があり、各授業が週 2 回ずつ行われる。授業は 1 日に 2 コマあり、週で合計 10 コマの授業を受ける。授業時間は一限が 9:30～11:30、二限が 12:30～14:30 であり、3 週間で計 60 時間もの時間、英語で授業を受けることになる。その後 15:30 から、マレーシア人学生主催のアクティビティが開催される。開催は毎日ではなく、不定期である。週に 2， 3 回行われ、その際には前もって連絡が来る（詳しくはアクティビティの欄に記載）。それ以外の時間は、バディとの交流の時間になる。授業によっては、バディと協力して行わなければならない課題が出るものもあるので、週 2、3 回はその件でバディと通話等を行う必要があった（詳しくは授業内容、課題の欄に記載）。

【1 週間の主な予定】

	9:30~11:30	12:30~14:30	15:30~17:30
Monday	Malaysian Studies	Writing&Composition	Activities
Tuesday	Speaking&Pronunciation	Grammar Usage	Activities
Wednesday	Reading&Vocabulary	Malaysian Studies	Activities
Thursday	Writing&Composition	Reading&Vocabulary	Activities
Friday	Grammar Usage	Speaking&Pronunciation	Activities

●授業ごとの内容・課題

・Writing and Composition

講師は Mr. Mohd Shaiful Rizal Hassan

この授業では主にあるトピックについて自分の賛成か反対かの立場を述べ、その根拠を説明する文章(argumentative essay)や、円グラフなどの資料に示された情報を記述する文章(descriptive essay)、および物語文(narrative essay)の書き方をそれぞれのタイプの文章で使えるフォーマットなどを利用しながら学ぶことができた。課題はそれぞれの授業ごとに課され、その授業で学習したタイプの文章を自分で完成させる課題などがあった。

・Speaking and Pronunciation

講師は Ms. Nur Amira Pang Abdullah

この授業では講師の先生から出される様々なトピックについてクラスメイトと議論することが主であった。トピックの例としては「無人島にアイテムを 10 コ持っていくとしたら、何を持っていくか」など新鮮なものが多く、また英語による本格的なディスカッションを体験することができた。課題としては、先生から与えられたトピックについて自分のバディと議論し、それを録画したものを提出する課題などがあった。

・Grammar Usage

講師は Mr. Hashim Ghany Bin Ibrahim

この授業では英語で用いられる基本的な 12 の時制について学びを深めた。具体的には will と be going to の文脈による使い分けなどといった進んだ内容の学習が多く、また授業の進行にはゲーム感覚で学べるクイズが用いられ、楽しみながら学ぶことができた。課題はその授業で学習した時制の復習が基本であった。

・Reading and Vocabulary

講師は Mr. Rajasingham Sivarajasingham

この授業では講師の先生から提供される様々なトピックにまつわる文章を読みながら、批判的に文章を読む力や豊かなボキャブラリーを構築する力を学んだ。文章のトピックは動植物の絶滅に関するものから文化のタブーに関する記事まで、非常に多岐にわたっていた。課題は特になく、当該範囲の予習などが中心であった。

・Malaysian Studies

講師は Mr. Muhammad Aiman Syafiq Sabri

この授業ではマレーシアの言語や食べ物、宗教的な儀式や歴史的な場所など非常に広範囲にわたる文化を学んだ。課題は特に課されなかった。

●アクティビティの内容

・Ice Breaking Game

3 つの文に 1 つだけ嘘を混ぜて自己紹介をし、それを見破るというゲームや、自分の名前にちなんだ形容詞を 1 人ずつ言って繋げていくというゲームを行った。初めてのアクティビティで緊張していたが、皆とてもフレンドリーに迎えてくれてすぐに打ち解けた。他のメンバーのことを早く覚える良いきっかけにもなった。

・Buddy Quiz

自己紹介や授業内で言っていた内容に基づき、参加者全員分のプロフィールにまつわる〇×クイズが出題された。自分や周りの人がクイズの対象になるというのは新鮮で面白かった。

・Video Sharing

これまでの本プログラムの様子をビデオで見た。皆で観光をしたり、踊ったり、ゲームをしたりしてとても楽しそうに過ごしており、実際に現地に行って参加した人たちを羨ましく感じた。

・Virtual Tour

マレーシアと日本の観光地について紹介し合った。マレーシアの観光地について詳しく知ることができ、実際に行ってみたいという気持ちが高まった。

・Virtual Fashion Show

民族衣装などを実際に身につけたり、写真で紹介したりした。マレーシアの民族衣装はマレー系、中国系、インド系で異なり、ここでも多様性を感じた。

・Art Performance Sharing

お互いの文化を紹介した。マレーシアの Chinese Lion Dance(中国獅子舞)の紹介や日本からは落語や歌舞伎、雅楽などの紹介があり、マラヤ大学の学生がとても興味深そうに聞いていたのが印象的だった。

・ASMR

一人ずつ local food を用意して紹介し、実際に味わって音を聞かせ、食レポをした。お互いの食文化がわかる上、バーチャルながら一緒に食事が出来て楽しい時間となった。

・Malaysian Fork Songs

マレーシアの歌を覚え、ランダムに指名していき一人ずつ歌うゲームをした。オンライ

ンによるタイムラグで一緒に歌うのが難しい中、考えた人がすごいと感じた。

・Talent Show

ギターや歌やダンス、けん玉などの披露があった。最後には日本の学生から感謝のメッセージのビデオを紹介し、ローカルバディとの絆が深まったように思う。

・Closing Ceremony

最終日の授業後に行われた。各教科の先生方からメッセージとローカルバディからは思い出が詰まったビデオが紹介され、感動的で忘れられないものとなった。

●プログラムのメリット・デメリット

このプログラムの良さを語るならば、まずは、コストパフォーマンスの良さだ。プログラムへの参加費用の大部分を大学側が負担してくれるため、たったの２万円で参加できる。プログラムを終えて、この経験を２万円で得られるなら非常に安いと感じた。学習内容については、マレーシアは多民族国家なので様々な文化に触れることができる。英語に関しては、オンライン留学の性質上日本人で集まって日本語で話す機会が全くないので、英語しか使わない環境に身を置くことができる。余談であるが、マレーシアではビジネスシーンで英語を使うことが普通で、皆流暢に英語を話す。その他の点では、マレーシアとは日本との時差がちょうど 1 時間しかないので、時差による不便が全くない。連絡などをする際も向こうの学生の生活リズムを気にする必要も特にないのでやりやすい。またマレーシアの人からは全体的に親日の、ウェルカムな印象を受けた。総合的に見て、このプログラムは異文化理解、英語力向上の両面で優れていると感じた。

あえてマイナスポイントを伝えるとするのであれば、大きく２点がある。１点目は、高いコミットメントが求められる点である。このプログラムに参加しようか検討している人は、意外と時間は取られるという点に留意してほしい。授業自体は時間が決まっているものの、時間がかかる課題が多く出される。このプログラムは２時間×2 コマの授業と週２・３回ある 3 時間のアクティビティによって構成されている。授業では、宿題を多く課される場合もあり、とても忙しかった。平均すると、１日１時間程度の時間外学習を求められていたと思う。筆者はバイトをしながらの参加だったので、時間が十分に取れなかった。プログラムの事前学習・事後学習でも時間が取られる。２点目は、マラヤ大学の学生は、日本の学生よりも英語を話せるが、マレーシアの公用語はマレー語であり、英語のネイティブスピーカーではないということである。そのため、お互いに第二言語で会話をするという難しさがある。

b. プログラムのハイライト

ここでは、それぞれがプログラムの中で最も印象に残っていることについて述べる。

●オンラインならではのバディとの交流（工学部 1 年 向笠紘平）

このプログラムの一つの大きな目玉として、日本の参加者一人に対してマレーシアのバディ一人がつくことが挙げられる。私はこのバディという仕組みがこのプログラムの中核をなすといっても過言ではないと思う。それほど私のバディ、Darwisy Haikal との交流は非常に大きな意味のあるものであると感じる。まず、プログラムが始まる少し前から彼との交流が始まった。当初、私にとって初めての国際的なプログラムということもあって私は非常に不安であったのだが、彼が LINE を通じて私自身のことや日本のことを尋ねてきてくれたおかげで私の不安は払しょくされた。連絡ツールが LINE という手軽なものということもあって、その後もお互いの日常をシェアしあった。時にはビデオ通話も使って、アニメや映画といった趣味の話題から、LGBT や宗教といったセンシティブな話題まで、たくさんのコミュニケーションを交わし、お互いの文化を理解しあうことができた。今回の研修は残念ながらオンラインでの開催であったためにバディと直接会うことは叶わなかったが、オンライン上で SNS を用いたコミュニケーションが主だったからこそ学んだこともある。例えば、英語話者の SNS でのスラングや顔文字の使い方である。私はこれまでインフォーマルな場面での英語には触れてこなかったために、今回の研修で初めてそのような文化に触れることができた。これは非常に大切な経験である上に、オンラインならではの魅力なのではないだろうか。

●Virtual Fashion Show（理学部 1 年 高橋諒）

私が今回のプログラムで特に印象的だったのは、マレーシア人学生が主催してくれたアクティビティの一つにあった「Virtual Fashion Show」である。学生が、それぞれの国の伝統衣装を身にまとい紹介するというものであったが、マレーシアは多民族国家ということもあり、彼らが紹介してくれる衣装は民族や宗教ごとに様々なものがあった。日本ではあのように多様な文化に触れることは出来ないため、非常に新鮮で興味深かった。日本人学生は袴や浴衣を着ていたが、自分はあいにくそれらを持ち合わせていなかったため、日本で盛んなスポーツであり、自分も高校まで部活をしていた野球のユニフォームを紹介することにした。その紹介自体はある程度好評だったようだが、やはり日本らしい衣装を紹介したかったという気持ちが強く、若干悔しさが残った。今後海外の学生と交流する際には、日本的な衣装を準備しておきたいと感じた。また同時に、伝統的な衣装を何も持っていなかったという事実に、自らの日本人としてのアイデンティティに疑問を抱く機会になった。マレーシアの学生は、マレーシア人としてその衣装、文化をしっかり紹介していたが、自分にも同じことがはたしてできるのだろうか。自分の日常に日本らしいことは何かあるのだろうか。今一度自分が「日本人である」ということに気づき、考えさせられるような経験だった。

●ディベート（経済学部 2 年 重富直樹）

私が一番印象に残っているのは、スピーキングクラスでのディベートだ。最後の 2 回の授業を使って行われた。やり方としては、全体を 4 つのグループに分け、テーマに対する賛成チーム、反対チーム、議論を活発にするためにあえて反論をするチーム、総評をするチームという 4 つの役割を順番に行った。与えられたテーマは、「スマートフォンを使うのはよいことか」、「ドラキュラはエイズに感染するか」などといったものであった。これらの問いには正解がなく、重要なことは自分の意見に対する論理的な根拠と適切な事例を述べることと、賛成意見、反対意見を述べる際の定型表現の実践だった。私はスマートフォンについて反論、ドラキュラについて賛同の立場を演じた。反論の役割のとき自分の主張について質問が来たのだが、効果的な事例を持ってくることができず、自分の主張を繰り返すのみにとどまってしまった。後にマラヤ大学の学生から、このような事例を言えばよかったのではとアドバイスを受け、もどかしい思いをした。発表前に自分の思考を実例と結び付けてよく整理しておけなかったことを後悔している。また、後から自分の意見を述べる際、相手の意見を踏まえて自分の主張の述べ方を臨機応変に変えられなかったことも反省点の一つだ。マラヤの学生はそれができており、悔しい思いをした経験となった。

●歌のアクティビティ（経済学部 3 年 阿部圭佑）

ここで伝えたいのが、マレーシアの歌を歌うアクティビティについてです。ここまで読んだ方は上の部分で見たと思いますが、このプログラムでは週に 2・3 回程度のアクティビディがあります。その中の 1 個のアクティビティが今回取り上げるものです。このアクティビティでは、マレーシアの歌を順番に歌うというアクティビティです。一節ごと歌い、歌ったあとに次に歌う人の名前を言います。もちろん、日本の学生にとっては知らない歌でその場で曲を聞いて覚えるので、とても難しいです。僕の場合は、ネットで歌詞を調べていましたが。最初は恥ずかしかったですが、途中からは恥ずかしさも消えました。

●マレーシアの文化・日本の文化紹介（文学部 4 年 塚原典子）

Malaysian Studies の授業では、マレーシアの様々なことについて学んだ。マレーシアの歴史、マナーやマレー語について、地域の文化や結婚式の文化、伝統的な衣装、ビーズの靴やバッグなどの伝統工芸や観光地、また地域の食文化について学んだ。マレーシアは主にマレー系、中国系、インド系の民族がいて、それぞれ独自の宗教と文化を持っている。主な宗教はマレー系がイスラム教、中国系が仏教、インド系がヒンドゥー教となっていて、それぞれの宗教に基づいた行事があり、生活があると学んだ。その他にもイギリスの統治の歴史の影響からキリスト教も多いなど、多民族多宗教な国であることが理解できた。

私のバディをしてくれたジョーレンは中国系の学生で、一緒に取り組んだ課題の合間に彼と色々話したことも理解を深める助けになった。イスラム教ではラマダンという断食の時期があるが、私はイスラム教の戒律がどれくらい厳しいものか事前に詳しくは知らなか

ったので、大変興味があった。断食期間は日が出ている間は水さえ飲まないため、イスラム教徒の学生は授業中に元気がなかったり、金曜日の昼には大事なお祈りがあるので、お祈りが終わってから授業に来たりするという話が興味深かった。また、ムスリムはムスリムとしか結婚できないため、他の宗教だった場合改宗する必要があるとのことだった。

授業後のアクティビティの時間でもお互いの文化を紹介し合う機会があり、Chinese Lion Dance では高い棒の上で舞うことがあるが、どのように乗るのかという質問に対して、後からその解説となるような動画を送ってくれるなどオンラインのメリットを感じる交流になった。

●ライティングと文法のスキルアップ（文学研究科 博士１年 鏡耀子）

自分にとって特に大きな収穫であったと感じるのは、文法やライティングの授業で得た知識である。これらの授業では、今まで特に苦手だと感じてきた部分について、明確な改善策を与えていただいた。

ライティングの授業では、様々な種類のエッセイについて、段落構成の型や有用なフレーズを学び、エッセイを組み立てていく練習をした。ゼロの状態から始めて 1 つずつ進めていくと、気づけば 500 字程度の小論文が書けるようになっていた。以前は英語で文章を書こうとすると何から考えて良いか分からずパニックになっていたが、基本的な型とフレーズをおさえておけばある程度きちんと形になるのだと分かった。また、練習問題は IELTS のライティングの問題に準じた形式となっており、IELTS 対策としても大変有効なものとなった。

文法の授業では、個人的に最も苦手とするトピックの 1 つであるテンスについて、集中的に練習した。past, present, future という 3 つの時間軸と、simple, progressive, perfect, perfect progressive という 4 つのアスペクトから成る 12 のテンスがあることを確認し、それぞれの形式や意味の違いを表や図、例文を用いて繰り返し学習した。その後クイズでさらに何度も練習することで、これまで曖昧なままになっていたテンスの使い分けが明瞭に理解できるようになった。過去形と現在完了形の違いなど、細かいテンスの使い分けがなかなか理解できず長い間悩んでいた私にとって、これは大きな成果となった。

以上のような授業を通して、以前よりも自信を持って英語を使えるようになった。またこうした方法は、今後自分で言語学習を進めるときや、将来教育に携わることになったときにも活用できると感じた。

c. 研修体験・成果

プログラムを通して得られた成果と体験

工学部 1 年 向笠紘平

このプログラムを通して私が得られた成果や体験について大きく分けて二つの点から述べる。三週間という比較的短い研修期間ではあったが非常に密度の濃い時間を過ごすことができ、多くの学びを得ることができる貴重な体験となった。

今回の研修で得られた大きな成果の一つは英語に対する抵抗感を大きく低減することができたということである。このプログラムが始まった当初は英語を使うことに対して自信がなく、英語を使って自分の考えなどを説明することに少しためらいがあったのだが、このプログラムに参加したことで自分の英語に対して自信がつき、英語に対する抵抗が減ったと感じるのである。自分の英語に対して自信がついていったのは様々な理由があるが、まず挙げられるのがプログラムの中に組み込まれた 4 つの英語の授業である。これらの授業では自分の英語の力を総合的に伸ばすことができたと感じる。例えば、ライティングの授業では自分の文章をさらに効果的に構成できる術を学び、ライティングスキルがこれまでよりも大きく向上した。また、文法を学ぶ授業ではその文章が伝えたい意味を重視しながら文法の問題を解いたことにより、英語でコミュニケーションをとるときには細かな文法の間違いよりも伝えたい意味を重要視すべきであると学んだ。これまでの自分を振り返ると受験英語の影響で英文法の知識はある程度あったがために、英語で会話をするときには自分の英語が文法的に合っているかどうかをまず初めに考えてしまっていた。そのため文法の授業は英語でのコミュニケーションに対する姿勢を転換してくれる良い機会であったと思う。そしてすべての英語の授業で共通しているのが、どの授業の先生も間違ってしまうことを恐れるなと強調していたことである。さらに私がなかなか上手く意見を表現できないときは忍耐強く私に耳を傾けてくださった。これらのことは私の英語による自己表現を大きく促した上に、なにより英語で意見や考えを伝えられたという経験に基づく大きな自信を与えたと思う。

もう一つの大きな成果は国外の学生とのインターナショナルな関係を初めて築くことができたということである。このプログラムに参加するにあたって私は英語学習にのみ注目していたが、実際には英語学習はもとよりたくさんのマレーシアのバディとの交流が非常に充実していた。それを特徴づけるものとして放課後のアクティビティがある。このアクティビティは週に数回開催され、自己紹介から始まり、それぞれの国の衣装や食べ物、人気がある場所をめぐるバーチャルツアーなどを開催し交流を楽しんだ。国際交流の面からみると、お互いの国の文化についてより深く学べる絶好の機会であった。インターネットや書籍を通じては得られないような生の声を聴くことができ、興味深い学びへとつながった。さら

にマレーシアのバディはオンライン上であるということを意識させないほど優れたコミュニケーションスキルを有していて、彼らのプログラムに対する熱意や姿勢に感化されお互いの交流が深まり、有意義な時間を過ごすことができた。さらに英語力向上の面からみても、英語話者が日常会話の中でどのように英語を使うのか体験することができた。会話の内容などを完全に理解することはできなかったが、今の自分の英語のレベルと日常会話で必要とされるレベルとのギャップをつかむことができ、これからの自分の英語学習に対する大きなモチベーションを得ることができたのである。

私にとってこのプログラムに参加するということは不安や心配がつきまとうチャレンジであったが、それ以上にこの経験から非常に貴重で充実した学びを得ることができた。そしてなにより国際社会に対して大きな一歩を踏み出せたと感じる。いつか実際にバディのもとを訪れて本当のマレーシアを味わえるように、プログラムで得られた英語の力やバディとの関係をさらに充実させていきたいと思う。

研修の成果と今後の展望

理学部 1 年 高橋諒

私が今回のプログラムで得られた主な成果について、英語運用能力、異文化適応力、行動力の三つの観点から述べる。

まずは英語運用能力についてだが、今回の研修を通じてリスニング力とスピーキング力を特に伸ばすことが出来たと感じる。3 週間の間すべての授業が英語で行われるため、授業に集中して取り組むことで、自然とリスニング力は向上した。研修初週は Google Meet の字幕機能を多用していた私だが、最終週にはそれに頼らずとも講師やマレーシア人バディの発言意図をある程度くみ取れるようになった。また、授業内では講師から発言を促される場面が多々あった。そのような場面でできる限り発言していくことで、自分の伝えたいことを、ある程度素早く、英語で発信できるようになったと感じる。しかし全ての機会で自分の考えを発信出来たかというと、そうではなかった。発言したいことはあるものの英語で何と言えばよいか思い浮かばなかったり、自分の解答に自信がないため発言を躊躇してしまう場面も多々あった。まだ英語を話すことへの抵抗や恐怖心が完全に抜けていないと感じた。この点は、今後継続して英語を勉強することで払拭していきたい。次に異文化適応力について、自分がこの研修で特に学んだのはマレーシアの「多様性」と、そのような多文化国家を訪れた際の、その文化への適応方法である。今回の研修はオンラインで行われたが、パソコン越しでも伺えるような、現地の学生の容姿の多様性にまず驚いた。それは単に、一人ひとり顔が違うということなどではない。インド系、中国系などの多様な人種の人々が住んでいることがすぐに分かった。さらに授業を通じて、結婚様式や祝日なども宗教ごとに異なるこ

とも学んだ。オンラインでも多様性を強く実感するのだから、実際に現地に行ったときにはそれをさらに強く感じるだろう。その際文化に適応するためには、日本で暮らしているとき以上に「他者理解」が重要になるだろうと感じた。自分の固定概念にとらわれず、他の民族や宗教を持つ人々を広く受け入れること心を持つことが肝要である。マレーシアは多民族国家であるからこそ、自分と異なる文化、宗教の人々の考え方を受け入れ、協調していかなければならない。このように「他者を受け入れる」という習慣が生活に浸透していることが、現地の学生の多くが、寛大さや歓待の精神を持つ一つの要因になっているのではないかとも考えた。最後に行動力についてだが、このような国際的なプログラムに参加することは自分にとっても初めての経験だったため、参加すること自体に行動力が必要であった。また上記で述べたように、授業中には自発的な発言を促される場面が多々あるため、そのような場面で間違いを恐れずに発言することを通じて、行動力が向上したと強く感じる。

私は今回のプログラムに参加するまで海外に行った経験もなく、英語でコミュニケーションをとるという経験も非常に少なかった。このため、参加前は不安の方が大きかった。しかし、マレーシア人のバディがプログラム開始前から連絡をくれ、期間中も密にコミュニケーションをとってくれたことで、その不安は徐々に解消された。英語にある程度慣れている人はもちろん、海外経験があまりないが英語力を伸ばしたいという人にも、このプログラムは非常におすすめである。

英語への意識の変化

経済学部 2 年 重富直樹

このプログラムに参加して得た体験は、今後の私に影響を与える貴重な経験となった。ここでは、研修での体験と成果を文化交流と英語力の 2 面から述べる。

まず、文化交流の面から述べる。マレーシアは多民族国家なので、多様な文化に触れることができた。これまで本格的に異文化について知る機会はあまりなかったので、日本との違いを感じながら楽しく学べた。ただし、文化の知識はたくさん得られたが、やはり実際に食事や街、現地の人との共同生活を体感していないので、異文化への適応力という点では向上したかというと疑問が残る結果となった。

次に英語力に関してだが、今回のプログラムで得られた一番の収穫は、英会話に慣れ、英語で話すことへの恐怖を減らすことができたことだと思う。グループワークや発表の機会、バディーとの会話と、英語を話す機会は多くあったので、1 週目が終わったあたりから話すことへの緊張感が和らぎ始めた。初めのうちは文法のことを考えすぎたり英語でどう表現するのか知らない単語に当たったりして、言葉に詰まってしまうことが多かった。しかし回

を重ねるうちに、文法について考え過ぎるよりも何かしら発言すること、わからない言葉は他の知っている単語で伝えようとすること、わからないことは質問することが大切だと気付いた。そこからはそのことを意識して、黙り込まずにとにかく何か話すようにして会話を楽しもうと心掛けた。いい表現が見つからないときにも相手に概要が伝われば適切な表現を教えてもらえた。振り返ってみると、話せないことを恥ずかしがらずプライドは捨てて貪欲に話す姿勢を持ち、相手にもその姿勢を見せることが、話す能力の向上に大きくつながる要因だったと感じる。また、バディーと頻繁にチャットもしていたので、聞いたことのない話し言葉やスラングを知ることができたのも面白かった。

リスニング能力に関しては、授業で最低4時間は聞いていたので以前より理解できるようになった。初めは聞き取れなくても繰り返し聞くうちにわかるようになった単語もあった。例えば、何かを言った後に頻繁に口癖を言う教授がいたのだが、何度も聞いてその言葉が isn't it？だと気付いた。しかし以前より聞き取れるようになったとはいえ、やはり聞き取れないことも多くあった。２人で話しているときに相手の言ったことが聞き取れないと会話が止まり、白けてしまって申し訳なかった。今回のプログラムに参加して、英語はコミュニケーションの道具なのだという当たり前のことに改めて気づかされた気がした。今まで英語は勉強という風に思っていたが、英語は国籍に関係なく人々が分かりあうための共通言語、コミュニケーションの道具なのだという認識に変わった。私にとっての初めての海外体験（オンラインだが）はこのような認識の変化をもたらしたという点だけでも大きな意味があったと思う。生きた英語を学ぶことの大切さを知ったことは今後の英語学習に良い影響を与えるだろう。

最後に、オンライン留学ではフィジカルな関わりがないため自然と雑談をする機会はないので、自分から機会を増やそうと動く必要がある。積極性が大きく影響すると感じ、これからもそのようなことは多くあると思うので積極性を大事にしていきたいと感じた。また、このプログラムを通して英語の難しさや意識の変化に気づけて良い経験になった。

英語に対する抵抗感の減少

経済学部 3年 阿部圭佑

今回のプログラムの成果として、一番大きかったのは、英語への抵抗が減ったことです。恥ずかしながら、このプログラムに参加する前は、英語での情報取得はしていませんでした。英語の長文を英語の勉強以外で読むことは避けていました。

しかし、このプログラムでは、毎日4時間以上は英語に触れます。これまで避けていた英語を強制的に使う必要が生まれます。今までの学習のような Listening と Reading だけでな

く、Speaking と Writing も行います。授業中だけでなく、アクティビティやバディとのチャット・電話でも 4 技能を使います。

このプログラムを経て、英語での情報取得をするようになりました。主に、自分が興味を持っているコンサルティングファームの面接試験について、を YouTube で調べるようになりました。これはニッチな情報で、日本語ではあまり出てきません。しかし、英語で調べると多くの有益な動画に出会えます。このように、ニッチな情報でも英語で調べれば多くの情報が見つかります。英語に対する抵抗がなくなり、情報源が増えたことがこのプログラムの 1 番の成果です。

マラヤ大学オンラインプログラム参加の研修成果

文学部 4 年 塚原典子

今回のマラヤ大学オンラインプログラム参加の成果として、1．表現の幅が広がった、2．様々な場面で活用できそうなヒントを多く学べた、3．今後の課題に気づくことができた、4．英会話の緊張感が減少した、という 4 点を挙げたい。

はじめに、今回多くの学生と一緒に学べたことで、他の学生の話す言い回しから、どのような場面でどういった言い方をしたら良いのかを学ぶことができ、表現の幅が広がった点を挙げたい。独学で英会話をマスターしようとする盲点として、意思を伝える際の表現が限られてしまうということが言えると思う。自分の得意な表現で意図を伝えることができれば、それで事足りてしまい、他の表現を身につけようとまでは考えが至らない為である。他にも自分ひとりの学習では疑問にさえ思えないことを、他の学生が質問してくれることがあり、文法などわかりにくい箇所の詳しい解説を聞けたことが良かった点といえる。

二つ目の成果として、交流促進が必要な場面で活用できる工夫を学べた点を挙げたい。隔日で行われた放課後のアクティビティは、必ず出席しなくてはいけないものではなかったが、マラヤ大学の local buddy が毎回工夫をこらし、楽しい企画を考えてくれていたので、何とかスケジュールを調整して出席したくなるものだった。お互いをよく知ることが出来るようなクイズを考えてくれ、さらにアプリを活用してよりゲームらしくしたり、歌を歌って和やかな雰囲気を作ってくれたりするなど、様々な場面で活用できそうなヒントを多く学ぶことができた。研究室や勉強会など今後の活動の中で組織のイベントなどを運営する立場になった時、とても参考になることを学ぶことができた。

三つ目の成果は、ナチュラルスピードの会話についていくリスニング力をつけることが、今後の課題だと気づけたことである。学生の話すスピードはかなり速いと感じ、理解することが難しい場面もあったためだ。講師の先生方の話す速度にはほぼついていけたが、学生がディベートや授業の中で自分の意見を述べるなど、熱が入って話す場面では話す速度は速

くなりがちであり、完全に理解することは難しかった。
　最後に、英語を話す場面での緊張感がだいぶ取り除かれたことを成果として述べたい。これはマレーシアの人々がみな優しく、話しやすい雰囲気でいてくれたお蔭だ。先生方はオープニングセレモニーから、「３週間は短いので意欲的に参加するように」「英語の上達のために間違いを恐れないこと」と有益なアドバイスを下さった。授業中先生方はゆっくり話してくれ、度々理解できているか確認してくれるので分かりやすかった。一人ずつついてくれるマラヤ大学のバディの学生も授業で難しいことはないか、わからないことがあれば何でも聞いて、といつでも頼りになる存在だった。バディと一緒にすることという課題が度々出され、その合間に色々なことを話す中で友情を深めることもできた。
　このプログラムを通じてバランスよく英語を学ぶことができた。「間違えることを恐れないで」「継続が大切、続けること」という先生方の教えを胸に、今後も英語力の向上に取り組んでいきたいと思う。

プログラムを通して得たこと・考えたこと

文学研究科 博士 1 年 鏡耀子

　ここでは、本プログラムを通して得た成果を大きく 3 つの観点から述べた後、積極的に参加するということの大切さについて考えてみたい。
　成果の 1 つ目は、英語力の向上についてである。じっくりと時間を使って英語に浸かることで、英語を使うことに慣れてきたという実感が得られた。実際に海外に行かなくとも、徹底的に英語を使う時間をある程度設けるだけで違うのだと分かった。また本プログラムでは、話す・聞く・書く・読むという四技能が授業で網羅されており、それぞれの授業でスキルアップのための明確なステップを示していただいた。どのように英語力を伸ばしていけば良いのかが具体的に分かっていなかった私にとって、それらは大きな助けとなった。さらに、ローカルバディが何気なく使っている表現にも便利なものがたくさんあり、それらを実際の会話から修得できたことも良かった。
　2 つ目は、異文化の理解についてである。マレーシアスタディの授業やバディとの会話を通して、マレーシアにはどのような文化があり、それはどのような意図や背景によるものなのかを理解することができた。例えば、マレーシアでは人の家を訪問する際に黒い服を着たり、贈り物を白い紙で包んだりすることは、葬式を連想させるためタブーとされているという。また、イスラム教徒の多い国であるためクリスマスは祝わないと思っていたが、日本と同様に商業的なイベントとして楽しむ人が多いという。ただしキリスト教徒も一定数存在しており地域によっては本格的に祝うということと、国全体が多民族国家で互いの宗教を尊重する風潮があるため、クリスマスも国民の祝日に指定されているということを知った。

このように、全く異なる文化を持つ国について、様々な角度から発見を得ることができた。
3つ目は、マレーシアの学生との交流についてである。ローカルバディは皆本当に明るく親切で、オンラインでも楽しめるよう様々な工夫を凝らしてくれた。今後私が海外から来た人を迎えることになった際には、彼らをお手本にして温かく歓迎したいと思う。特に私のバディであった Rees とは、初めて連絡を取り合った日から互いの日常を共有し合い、互いの文化についてたくさんの情報を交換し、良い関係を築くことができた。宗教にまつわる話などはデリケートな問題も含んでいてなかなか直接聞ける機会がないが、彼女はどんな質問にも丁寧に答えてくれた。そして最終日にはオンラインで写真入りのメッセージカードを作って贈ってくれたり、先日宮城で大きな地震があった際には心配して連絡をくれたりと、プログラム内でのバディという関係を越えて、今では私の大切な友人の1人となっている。そのような素晴らしい友人を得ることができたということも、大きな成果であったと思う。

以上のように、私はこのプログラムを通して予想以上の実りを得ることができたと感じており、他の人にも強く参加を勧めたい。そして、様々なところで言われることであると思うが、参加する際にはぜひ積極的になってみるべきであると思う。

私は元々内向的な性格で、さらに英語で話すことのプレッシャーを強く感じるため、積極的になれと言われても…という抵抗感もとてもよく分かる。しかし、英語を使うプログラムに参加する度に、勇気を振り絞って不格好な英語を話す方が、沈黙しているよりもはるかに良いのだということを実感させられる。「海外では沈黙しているとやる気がないと思われるから」というのもその理由の一つではあるが、それだけでなく、積極的でいた方が単純に自分に返ってくるメリットが大きくなるからである。

まず、自分が話せば話すほど、相手から返ってくる情報量も大きくなり、より多くのことを吸収することができる。また、何か質問やコメントをしようと思いながら人の話を聞くと、自然と普段以上に集中して話を聞くようになり、内容が頭に入ってきやすくなる。さらに、質問やコメントをすると相手の話に興味があることを示すことができるため、相手の印象に残りやすくなり、良い関係を築きやすくなる。私自身アクティビティの中で短いスピーチを行った際、自分が何か話した後に質問が来ると、興味を持って聞いてくれていたのだと分かり嬉しくなると気づいたため、相手の話にしっかり反応することをより意識するようになった。そして何より、話せないなりにとりあえず何かしら言ってみているうちに、だんだん慣れてコツが見えてきたような気分になる。このコツを早く掴むことが、英語習得への早道なのではないかと思う。

英語を使う環境で積極的になるというのはとても勇気のいることであるが、英語を使えるようになりたいと思う以上、この壁はどこかで乗り越えなければならない。そのきっかけとして、このプログラムは最適であると感じる。ここでは勇気を出して何かを言えば、とても快活でフレンドリーなローカルバディたちが全面的にサポートして盛り上げてくれる。せっかくお金と時間を使って参加するのであれば、積極的にあれこれ言ってみたりやってみたりした方がはるかに得るものが大きくお得であるし、ここにはそれを歓迎してくれる

環境がある。とてもコスパの良いこのプログラムを、ぜひともさらにお得に活用していただければと思う。